戦争を知らない世代へ ❶ 沖縄編

打ち砕かれし うるま島

創価学会青年部反戦出版委員会

第三文明社

戦争を知らない世代へ 1
打ち砕かれしうるま島

昭和49年6月23日　初版第1刷発行

編　者　創価学会青年部沖縄県反戦出版委員会
発行者　創価学会青年部反戦出版委員会
発行所　株式会社　第三文明社
郵便番号　101　東京都千代田区猿楽町2-5-4 OGAビル
印刷所　凸版印刷株式会社

発刊の辞

私たち創価学会青年部は、昭和四十九年一月二十日の第二十二回青年部総会で、信仰人としての社会的信念に基づき「平和憲法擁護に関する青年部アピール」を採択し、平和憲法を守り抜く活動を積極的に展開することを決意した。

いうまでもなく、日本国憲法の根底をなすものは「憲法三原理」と呼ばれる精神である。なかでも、前文及び第九条にうたわれた絶対平和主義の理念こそ、他に類例をみない優れた思想であることは論をまたない。私たちは、この絶対平和主義の理念の灯をたやすことなく、否、日本のみならず、これからの世界各国民の世論にまで高めようとの決意に立った。何故なら、私たちの信奉する仏法思想は、何よりも生命の尊厳という理念に貫かれており、その理念の延長こそ、地上から戦争を抹殺し、絶対平和の社会を現出することに他ならないと確信するからである。

その実現の方途として、私たちは、反戦出版活動に取り組むことを決意した。悲惨な戦争の体験は、時とともに忘れ去られようとし、この本の副題にある「戦争を知らない世代」が増えつつある。この世代に、戦争のいまわしさを、訴えかけ、一人一人の心の中に反戦の砦を築かぬ限り、人類は、また、愚かな戦争を繰り返すであろう。

一方では、憲法第九条の精神を骨抜きにし、自衛のための戦争は許されるとして、着々と軍備を増強している勢力がある。また、かの靖国神社を再び国営化し、新たな戦没者を祀ることを意図した法案さえもが、白昼堂々と衆議院を通過する時代である。このような勢力こそ、民衆を再び悲惨の極へと追いやる〝魔の勢力〟であることを、私たちは知っている。私たちは、この反戦出版活動を通して、地道ながら、堅固な反戦の砦を、全民衆の心の中に築き、断固として、これら〝魔の勢力〟の跳梁を許さない時代を創りたい。

こうした時、六月二十三日の〝沖縄終戦の日〟を記念して、創価学会青年部沖縄県反戦出版委員会の手により、私たちの反戦出版第一号ともいうべき「打ち砕かれしうるま島」が発刊されることとなった。沖縄の同志の反戦へのたくましき決意と、編集に流した涙と汗に対し、心から敬意を表するものである。

最後に、本書の上梓に、陰の努心を惜しまなかった松島規、外山武成両氏をはじめ中央の反戦出版委員会のメンバー、及び第三文明社の方々に、心から謝意を表するものである。

昭和四十九年五月二十九日

創価学会青年部
平和憲法擁護運動推進本部長　野崎　勲

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目

次

発刊の辞　1

●北　部

独立混成第四十四旅団……金城義信　10
戦争、そして私は……松江テル　18
三日三晩歩いた避難行……棚原志津子　30
捨て去られた負傷兵たち……照屋恵津子　35
玉砕した鉄血勤皇隊……稲嶺安宣　39
食糧の奪い合い……呉屋春仁　44
二か月の子を連れ避難……宮平美津子　47
恐怖と絶望の避難生活……宮島千代子　51
敵兵におびえる日々……上原潔子　58
避難行で赤子を拾う……小嶺美代　64
栄養失調で倒れる人びと……花城春子　67
忘れえぬ日本兵の非道……横田秀子　71
女手一つで頼る人もなく……仲宗根マンチ　75

伊平屋島での戦況……赤嶺　繁　77
オタマジャクシまで食べて……大城シゲ　81
少年の見た避難生活……上原誠太郎　84
幼な子の魂の見たもの……宮城里子　91
子を背負い弾雨の中を逃げる……仲程久子　96
悲しき避難民……平良太郎　101
父の形見の戦死公報……山田春子　117
戦争に奪われた青春……花城シゲ子　123
山中の避難小屋……与儀幸盛　128

●中　部

集団自決……天久マカト　134
凌辱におののく女性……吉本敏子　137

●南　部

沖縄戦の残像……渡名喜義男　142

友よ安らかに……渡名喜敏子 157
娘二人と主人を奪われて……金丸ツル 169
変わり果てたわが姿……徳元文子 175
ひめゆりの友の最期……石川幸子 186
重砲隊で死闘を続ける……徳城清孝 206
みなし児となって戦場をさまよう……神谷洋子 210
醜い日本軍……殿内スミ 220
黒こげになった学友……花城康明 224
砲弾で倒れ行く人びと……宮里亀栄 228
死んだ母親の乳を吸う赤子……大城トミ 232
墓の防空壕……桃原初子 236
毒ガスの中で生きのびる……末吉和子 241
生きのびた従軍看護婦……坂井末子 248

●島部・本土疎開

南大東島で……豊浜朝康 256

八重山のマラリヤ……具志光枝 259
学童疎開・対馬丸の最後……田名宗徳 263
〝生きて〟といえなかった私……赤嶺恵子 282
サイパン島を後に流浪の身……城間　静 288
あとがき 291
沖縄戦年表 294

沖縄戦々図

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

北

部

沖縄に上陸した米軍部隊（『沖縄戦記録写真集』下地一秋著より転載）

独立混成第四十四旅団

那覇市　金城義信（60歳）
〈球七〇七一部隊所属〉

召集解除

私が第二次世界大戦に召集されたのは昭和十九年八月のことでした。独立混成第四十四旅団が、鹿児島を出港して、種子島沖で米軍の潜水艦の攻撃をうけましたので、その生き残りの兵と共に独立混成第四十四旅団の強化補充のために、私は応召したのです。

名護を中心とする国頭部隊の球七〇七一部隊に入隊し、十月十日の空襲時には私は名護にいて、水際作戦のため名護城の下に壕掘りをしていました。いよいよ戦争が目前に迫った感がして、日が経つにつれ食糧事情も悪くなり、私たちの部隊は嘉津宇岳を中心とする山岳に陣地をかまえて、米軍の上陸を待つような状態でした。いよいよ沖縄が軍艦で取り囲まれた後は、毎日、艦砲射撃が安和岳を中心に雨あられと降ってまいりました。

特に本部（もとぶ）町の西側から艦砲の援護射撃を受けた米軍兵は、五日ほどで崎本部方面を守っていた一個中隊を全滅させてしまいました。

安和岳にて一週間目には、私たちの中隊も馬乗り（自分たちの陣地の上に敵が来ていること）にされたのでした。そのため私たちは、その夜のうちに本部の安和岳から羽地の多野岳に撤退することになりました。そういうと簡単のように思えますが、その間の戦闘は全く悲惨なものでした。自分の知人、親友を失い、多野岳に着いた時には、私たちの中隊は半数になっていました。それほどひどい負け戦でした。

やっと多野岳に着いたものの、食糧もなく、そのために、沖縄出身の兵は自活せよといわれ、早速その場で召集解除となりました。それが昭和二十年五月のはじめのころです。

この山原では、このままでは食糧もなく、同士討ちするしかないと考え、また、どうしてもこの戦争に勝つのだ、との意気で、私は五人の戦友と共に羽地を退却しました。

また、当時の日本兵の暴挙は目にあまるものがありました。民間の人びとを、作戦のためだといって防空壕から追い出し、防空壕の中に置いてある民間人の荷物を強奪したり、民間の人に徴用だといって馬を持ってこさせ、その馬を沖縄の老婦人たちに殺させ、肉は日本兵がとり、それを沖縄の民間の人に現金で売りさばき、金をたくわえている者もおりました。屠殺した老婦人たちにはそのお礼だといって、馬の皮と骨だけを残してその場から去っていったのです。

食糧難の時であったので、馬の皮を煮て食べようとすると、煙が出て、敵に居場所を知らせるようなものである、といわれて、日本兵から暴行を受ける者もいました。

日本兵が沖縄の民間人に命令したことは、子供が泣くと敵に発見され、皆殺しにされるので、子供を自分の手で殺せ、そして、絶対に捕虜になるな、捕虜になりそうな時は、自分の命を自分の手で断て、ということでした。

私たちが山原(ヤンバル)から退却してくる時、母親と子供が倒れているのに会いました。子供も死んでいるものと思いながら、母親の乳房にすがっている子供を揺さぶったら、その子供は生きていました。だが、無残にも、その母親の首はちぎれてありませんでした。

私は、その子供を抱きあげ、一キロほど進むと、その子の祖父母に会い、無事引き渡すことができました。敗残兵の姿も惨めでしたが、それ以上に、何の罪も力もない民間人が、なお一層気の毒でした。

南部へ

私は五人の戦友と東村の川田部落に着きました。幸い、川田部落の浜辺にサバニ（舟）がありましたので、部落の公民館の床板をはぎとり、それでカイを作り、夜陰に乗じて川田部落を出て、夜明けまで懸命にこぎ続けて着いたのが金武村の祖慶でした。

祖慶では、昼は壕の中に隠れ、夜になってから、再びサバニをくり出し、平安座に着きました。平安座ではちょうど月夜になったため、知人の家の床下にかくまってもらいました。どこから

聞いたか、ハワイ帰りの人で以前から米軍に通じていたといわれる人が、私たちを捕えるといって、随分探し回っていたようですが、知人の好意で二、三日ほどかくまってもらいました。

月がかげりはじめたころ、そのうちに雨が降りはじめ、シケ模様になったので、チャンスだと思い、サバニを出しました。勝連半島を回りかけたころ、やはり米軍の軍艦や輸送船が沖縄を包囲していましたが、それらの軍艦に報知装置でもめぐらしてあったのか、私たちの五百メートルほど前を進んでいた人たちが発見され攻撃を受けました。

そのおかげというと攻撃を受けた人たちには悪いのですが、私たちは無事に通過できたのです。

進む所すべてといっていいほど米軍の軍艦や輸送船でした。現在のホワイトビーチあたりでは、米軍艦が数隻停泊し、照明弾を陸に向けて発射して、その明かりで艦砲射撃をしていました。頭上を砲弾が飛んで行く様は、今でもまざまざと脳裏に浮かんできます。

灯台下暗しとでもいいますか、人間自分の足もとは見えないといいますが、その時の米軍もそうだったのでしょう。陸上に向けての攻撃に夢中で私たちが通過しようとしていることを知らなかったようです。

私たちは、カイをこいだら白波が立ち、もし発見されたらという不安で、軍艦と軍艦との間を静かにぬけて、その場を逃げることができました。

そして、与那原の海原も近くになった時、三角波に会い、サバニは半分ほど沈みかけました。

海岸までは五百メートルほどの地点でしたので、泳いで渡りました。やっとの思いで、与那原の板良敷に上陸したら、すぐに艦砲射撃を受けましたが、排水溝に逃げ込み、それを伝って逃げましたのでその時の難も逃れました。

当時の艦砲射撃は、昼夜の区別なくありました。昼間は、艦砲射撃がある前には必ず小型戦闘機（私たちはそれがトンボに似ているのでトンボと呼んでいました）が偵察にきましたので、避難することができました。

与那原の部隊の中隊長が私たちと同じ旅団でしたので、その部隊の人の案内でニシバルグヮー（大里村字西原）にあった大隊本部に連れて行かれ、山原の戦況を報告しました。すると首里の旅団本部にある司令部に報告せよとのことでしたので、私たちは南風原の後方の低地の川を伝って那覇に出、安里川沿いに壺屋を通り、首里の金城町を経て、司令部に到着し、牛島中将のもとに案内され、山原の状況を報告しました。首里では一週間、退避壕をつくる作業を手伝いました。

与那原から首里に至る道程は、腐乱した死体の発する悪臭、雨あられのように降る砲弾、ガソリンを散布した後に焼夷弾を落とし、火の海と化しましたのでその火に焼かれたのでしょう、あたりにはたくさんの焼死体がころがっていました。これが人間なのだろうか、と思うほどそれは無残な姿でした。しかし、その時には自らが生きること以外は考えられませんでした。

首里の司令部が攻撃され、牛島中将らは撤退しました。その前に私は首里を出て、南風原を通

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com